

## ステップ6 支援者の決定

～支援者を決め、支援を必要とする方の特徴に合わせた支援を考えましょう～

### 支援者の決定 → P21「Q&A」参照

- 支援者の決定には、地域の方々の協力が必要です。災害時になるべく早くかけつけられる隣近所等の身近な方の協力が望まれます。
- 災害は昼夜を問わず発生しますので、近くに支援者が居合わせなかったり、支援者自身が被災する場合がありますので、複数の支援者を決めておくことも必要です。
- 個人と個人のマッチングのほか、隣保班全体で対応するなどの方法も考えられます。支援者や地域の状況にあわせて、できるところから協力しましょう。
- 支援者の氏名や支援内容などの避難支援に必要な情報は、必要に応じてあらかじめ市町村と協議しておくことで、市町村が作成する要援護者一人ひとりの避難支援計画（個別計画）に記載されます。（下図参照）

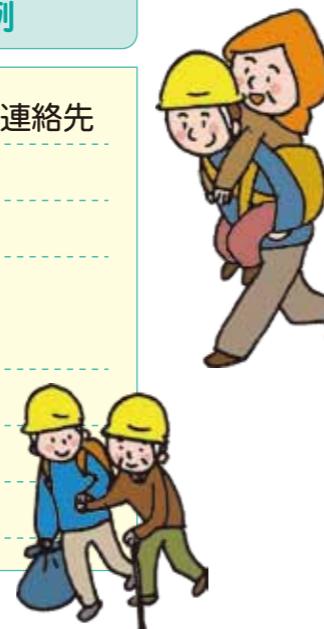
### 支援内容の確認 → P9「災害時の避難支援のポイント」参照

- 地域の実情や支援者の状況に応じ、実行可能な支援内容としましょう。できない支援や無理な約束は事故につながります。
- 支援を必要とする方やその家族と十分話し合い、個々の状況に応じた支援を心がけましょう。
- 可能であれば避難訓練やワークショップを通じて、より実効性のある支援方法を検討しておきましょう。



#### 避難支援計画（個別計画）の内容の例

① 氏名	⑨ かかりつけ医療機関名、連絡先
② 性別	⑩ 身体の状況
③ 生年月日	⑪ 支援内容
④ 住所	⑫ 支援者（複数）の氏名、住所、連絡先
⑤ 電話番号	⑬ 避難先
⑥ 家族構成	⑭ 搬送方法
⑦ 病名	⑮ 避難経路
⑧ 服用薬名	



## ステップ7 要援護者も参加する避難訓練の実施

～避難訓練で支援内容を確認しましょう～

### 訓練の定期的な実施と長続きの工夫

- 災害発生時に円滑に避難支援を行うためには、訓練の実施が必要です。
- はじめての経験だと誰でも不安ですが、平時に安否確認や避難誘導を訓練しておくと、いざという時にも落ち着いて対応できます。
- 地域の行事と組み合わせたり、訓練の内容に変化をつけて楽しめる内容にすると長続きします。
- 災害時に自然と体が動くよう、定期的に繰り返し実施しましょう。
- 子ども会などと連携して子どもが参加すると、楽しく明るい雰囲気が生まれ、親の参加も期待できます。
- 中学生や高校生などの若い人も頼りになります。防災訓練に参加を呼びかけ、若い世代の意識啓発にもつなげましょう。



### 訓練内容の例

- ◆ 支援を必要とする方も参加し、どのような支援が必要か確認。
- ◆ 寝たきりの方や身体に障がいある方などを避難支援する知識や技術の講習。
- ◆ 避難経路の安全性や障害物の有無、避難にかかる時間などを実際に歩いて確認。
- ◆ 支援を必要とする方の所在地、避難経路、危険箇所などを記載した防災マップづくり。
- ◆ 警報や避難勧告が耳や目の不自由な方にもきちんと伝わるかなど、正しい情報を確実に伝達する訓練。
- ◆ 書籍やビデオで、災害時にとるべき行動や支援の仕方・受け方についての学習。

### 振り返りによるステップアップ

訓練を実施した後は、良かった点や反省点を振り返り、新たな課題をみつけて次の訓練につなげましょう。

## ステップ8

## 関係機関とのネットワークによる重層的な支援

～様々な機関・団体と連携しましょう～

住民だけでなんとかするというだけでなく、福祉事業者、障がい者団体、医療機関、NPO法人などの様々な人材とネットワークを作り出していくことが大切です。

要援護者と日頃から接点のある団体等と連携し、支援の層を厚くしておきましょう。

例えば、近くの老人ホーム、児童福祉施設、障がい者施設などの社会福祉施設においては、災害時に緊急的な避難場所として、地域の高齢者や障がいのある方など特に配慮を要する方を受け入れることが可能な場合があります。